

小久保は佐々木を見た。「いよいよだな」

「ああ」佐々木はブラインドカーテンの隙間から外の様子を見ながら言った。「あいつらが頭を下げて謝罪する姿を見ることができなかったのが残念だが、俺は満足している。これをしたことで、俺自身の存在を呼び戻してくれた感じだ。俺はこの施設で自分の存在価値を感じられない日々を送っていた。時には俺が機動隊にいて浅間山荘で戦ったことがまるで自分が作り出した勝手な妄想ではないかと感じてしまう時もあった。そもそも俺という者が存在していたのかと疑問に感じたこともある」佐々木は山口に顔を向けた。「何もない生活を送ると、こうなっちまうんだよ。人はな、漠然と長く生き続けることに価値はない。自分らしい生き方を諦めないことが重要だ」佐々木は車イスを動かし始め、小久保に近づいた。「でもな、今日のことで俺は自分の存在価値を実感できた。最後は逮捕されようが、俺は満足している」佐々木は小久保に手を伸ばした。「感謝してる。ありがとう」

小久保も手を伸ばした。「こちらこそ」

二人は固い握手を交わした。

佐々木が窓際に離れて行くと、小久保は壁に取り付けてある畳一畳ほどのホワイトボードに気がついた。小久保はしばらくホワイトボードを見つめたあと、ホワイトボードに近づき、そばにいた鈴木に声を掛けた。

小久保に呼ばれた鈴木が近づいてきた。「何でしょうか」

「今から言う言葉をこのホワイトボードに書いてくれ」小久保はマーカーを鈴木に差し出した。「大きくだぞ」

「分かりました」鈴木は小久保の言葉をホワイトボードに書き始めた。途中、鈴木は言われた漢字が分からず、小久保に何度も聞きながら完成させた。

「こんなもんでどうでしょう」鈴木が言った。

小久保はうなずいた。

「小久保さん」鈴木が言った。「私も書いていいですか？」

「何を書くんだ」

「俺の思いです」真剣な表情で言った。

小久保は力強くうなずいた。「書きまくれ」

「はい！」鈴木はホワイトボードに書き始めた。

鈴木が書き終わると、山口がそばに来て、鈴木が書いた文字を読んだ。読み終わると鈴木に顔を向けた。「悪くない。よく思いついたな」感心を交えた口調で言った。

鈴木は照れくさそうに笑みを浮かべた。「もっとお役に立てればいいのですが」

「活躍の場はこれからいくらでもある。期待しているぞ」

佐々木が壁に掛かっている時計を見た。「突入まであと十五分」

小久保は山口を呼んだ。

山口は小久保に近づくと言った。「時間ですね」

「君達は応接室に入ってドアを閉めてくれ」

「分かりました」

皆が応接室に入り始めた。

「小早川さん」小久保が呼び止めた。小久保は彼女のそばに行くと、短剣を差し出した。

「これはお返しします。ありがとう」

小早川は短剣を受け取った。「父と夫はあなた達を褒めていますわ」小早川は応接室に入って行った。

山口は応接室に入る前、小久保に顔を向けた。「今更ですが、派手にやりましたね」

「口火を切ったぞ。後はお前達が声を上げる番だ」

山口は小久保を見ながらゆっくりと応接室のドアを閉めると、皆に体を向けた。「みんな、ちょっと話がある」そう言うと、山口は話し始めた。

「え！ マジで！」テレビを見ていた塚本が思わず大声で叫んだ。

日野が利用者のトイレ介助から戻ってきたとき、塚本の驚愕の声を耳にした。日野はテレビ中継から目が離せない塚本に言った。「ねえ、何があったの」

「警察が事務所に突入するみたいだ」塚本はテレビから目を話さずに言った。

日野はテレビに目を移すと、レポーターの姿が大きく映し出されていた。そのレポーターは警察の動きが慌ただしくなった様子から間もなく突入を開始するだろうと伝えていた。「やめて！」日野はテレビに向かって叫んだ。「相手は障害を持った高齢者よ！」

「日野さん、ちょっといい」ステーションにいた佐藤が日野を呼んだ。

日野は早足でステーションに入るや佐藤に言った。「主任、突入するみたいですよ」

佐藤はテレビに視線を移すと言った。「そうね」そう言うと、視線を日野に向けた。「突入するのをただ黙って見てるわけにはいかないわ」

「え？」

「日野さん、あなたはと思う。小久保さん達がやっていること」

日野はしばらく佐藤を見つめたあと、ゆっくりと話し始めた。「事務所を占拠したと聞いた時は本当に呆れました。きっと感情的になった勢いで事務所を占拠したと。でも」日野は織田が叫ぶ姿を思い返した。「今ではこう思います。彼らがしたことは、他の方法では訴えることができなかったと感じます。訴え方の選択肢を私達が閉ざしていたように感じてきました。これが唯一残された選択だったのかもしれませんが」日野はうつむくと、弱々しい声で言った。「私はこの介護の仕事をするうえで、手を抜いたことはありません。常に真剣に取り組んでいました。でも、それは日々の業務を問題なく遂行するという業務優先の目線で動いていただけです……主任、こんな部下をもって恥ずかしいですよ」

佐藤は内省する日野を見て、自分自身が情けなくなってきた。「自分を責めないで、こんな環境にしてしまったのは、主任である私に責任があるわ。小久保さん達が事を起こすまで気づかなかった、いえ、気にしていなかった。そして利用者の本当の思いをしっかりと受け止めることから自分を遠ざけていたの。でも、もう逃げちゃいけない。今こそ彼らの訴えを受け入れ、行動に移す時。私はそう感じるの」

日野は真一文字に口を結び、ゆっくりとうなずいた。

「それに、あなたと同じ思いを感じている人が他にもいるの」

「え？」

「介護長よ」

「介護長？」日野は目を見開いた。「ほんとですか」

佐藤は穏やかな表情でうなずいた。

「だって主任、あの人は現場を理解していない人ですよ」

「確かに業務優先の目線で見れば厄介な人になるわ。でも利用者優先でこの環境を見れば介護長は必要不可欠な人よ」

日野は自分と介護長のやり取り、認知症の利用者が何度もトイレに行きたがる際に介護長から出た言葉を思い出した。利用者の思いを尊重する介護。「確かに……」

佐藤は笑みを浮かべながらうなずくと、力強く言った。「^{きい}養は投げられた」

山口が皆に話し終えた時、彼の施設内 P H S が鳴った。山口は P H S を取った。「山口です」

P H S から聞こえてきた声は佐藤だった。「介護長、私もそちらに行き、両輪の轍を介護長と一緒に築いていきます。他のスタッフもあなたの思いに共感しています」

山口は佐藤の思いに心が震え、興奮している自分を抑える為に目を閉じて深く深呼吸した後に言った。「ありがとう。でも今ここに来れば後戻りはできないぞ」

「いざ鎌倉の気持ちです」

「何？」

「何でもありません。介護長、スタッフはあなたからの指示を待っています」

山口は感情が高ぶり声を詰まらせた。山口は再び深く深呼吸して落ち着かせた。「では佐藤主任、ここに来る前に一つ頼みがある。可能ならばの話になるが」

「何でしょう」そう尋ねた後、佐藤は山口の話の聞き始めた。

「こんな体じゃあな」佐々木が小久保に言った。「踏み込んできた警官と大立ち回りはできない」

「やれるだけやるまでだ」

「人事を尽くして天命を待て、だな」

「そのとおりだ。よくそんな言葉を思いついたな」

「浅間の時に現場を指揮していた警備局付が言ったセリフだ。お前を見ていたら山荘突入前に彼が言ったセリフを思い出した」

小久保は佐々木を見つめた。頼れる男だ。機動隊時代もきっと頼られたのだろう。

佐々木が車イスの背もたれに寄りかかりながら言った。「せめてゲバ棒くらいあればな。おい小久保、なんでゲバ棒を用意しなかったんだよ」

小久保は笑みを浮かべた。「すまん。次の時は用意するよ」

山口は応接室にいる皆を見渡した。「よし、行こうか」

応接室の皆がうなずいた。

小久保は応接室のドアが開いた音に気がつき、顔を向けた。山口を先頭に皆が応接室から出て来た。「何のつもりだ」

「バトンをいただきます」

「お前たちの出番は、このタイミングじゃない。早く戻れ」

「今の私達を誰も止めることはできません。それだけ強い意志を持っています」

「何をする気だ」

「私たち現場職員が腰を上げ先頭に立つ時がきました」

「全国の利用者もね」小早川が言った。「介護職員と私達利用者の絆は固いのよ」

小久保が苛立ちながら言った。「だから何をするつもりなんだ」

「おい！」佐々木が言った。「もう時間がないぞ。奴らが来る」

「まったく」小久保は吐き出すように言った。「分かった、好きにしろ。でもな、もう後へは戻れないぞ」

「ええ、覚悟はできています。強風に向かって立つ姿を期待してください」

山口は歩き出し、事務所の出入り口に向かい始めた。そして他の者も後に続き始めた。

小早川が小久保のそばに来た。「この国はまだまだ頑張れそうね」

小久保は口元に笑みを浮かべた。かもしれん。

「さて、私もあの若者と一緒に行くのでしょうか」

「えっ！　あなたは駄目だ。応接室に戻ってください」小久保は驚きのあまり、普段より声が大きくなっていた。「何をするか分らないが、あなたは離れていてください」

「私は今まで、戦いに行く父や夫の後ろ姿を見送ってばかりでした。軍人だった私の父は明治十一年に起きた近衛砲兵大隊の反乱、竹橋事件に参加した方です。父は改革を求め、死を覚悟して家を出ていきました。私はその後ろ姿を玄関で見送りました……それが父を最後に見た姿……私の体の中に流れている血は父の血を引き継いでいます。それに」小早川は口元に笑みを浮かべた。「もう後ろ姿を見るのには飽きましたわ」

小早川は顔から笑みが消え凍とした表情に変わり、背筋を伸ばした。「小早川^{ただみち}忠道の妻として立派におつとめを全うします」小早川はゆっくりと一礼した。そして、そばにいた古賀が彼女の手を取り、二人は山口達の後に続いて事務所を出て行った。

小久保は言い返そうとしたが、口を閉じた。

「彼女の意思を尊重しなければな」佐々木が言った。「この程度の事、人生の大波を何度も経験し生き抜いてきた彼女にとっては、小波にすぎないかもしれん」

小久保は事務所のカウンター越しに廊下を玄関に向かって歩いて行く小早川の姿を見続けた。「たいしたお方だ」

その時、小早川の後に続き、玄関に向かう人の姿が目に入った。それは佐藤だった。佐藤は立ち止まると、事務所内に顔を向けた。小久保と目が合うと、小久保に向かって笑みを浮かべた。そして佐藤は表情を硬くすると小久保に一礼し、玄関に向かって歩き出した。

突入準備が整うのを待っている加賀谷に澤田が近づいてきた。「早くあいつらを排除してくれ」

「排除？」加賀谷は自分の耳を疑った。排除だと、こいつ何を考えていやがるんだ。

「そうでしょ、だって施設を占拠してるんですよ」

「確かにそうだな」お前の言っていることは間違えじゃないが、なぜかむかつく。

「だったら早く動いて奴らを排除してくれ！ その為に来たんだろ！ あんな高齢者、君達だったらすぐに押え付けられるだろ」

「おい」加賀谷は澤田の顔に向けて指を指した。そして歯を食いしばりながら言い続けた。「いいかこのくそったれ野郎よく聞け、お前は俺の質問だけに答えればいい。これ以上何か言ったら、まずはお前を俺の前から排除してやる」

澤田は息を飲み、体全体が凍り付いた。加賀谷の口調や表情には、今まで何度も凶悪犯と対峙し、逮捕した経験から醸し出される威圧感を惜しみなく澤田に出していた。

澤田は加賀谷から殺気のような圧を感じ、思わず後ずさりすると車止めに足を取られ、勢いよく尻もちをついた。

「黙ってそこにいろ」加賀谷は吐き捨てるように言った。

大泉が加賀谷に近づいて来た。「警部、各突入班、準備ができました」

突入班は三つに分かれていた。第一班は正面入り口、第二班と三班は建物脇の出入り口から突入の合図を待っていた。

「分かった」加賀谷は腕時計を見た。突入まであと五分。加賀谷は煙草を取り出して吸おうとしたが、空だった。彼は予備の煙草を取り出そうとポケットを探し始めた。しかし、なかなか見つからない。

「警部！」大泉が言った。

「ちょっと待て」背広の内ポケットで見つけた。「何だ」煙草の封を開けながら言った。

「警部！」大泉は張り上げた。

加賀谷は大泉を見た。「だから何だ！」

「あれを見てください」大泉は施設の正面入り口を指しながら言った。

加賀谷は大泉の肩越しに施設を見た。正面入り口の前に人が横一列に並んでいた。加賀谷は目を細め、その列を凝視した。加賀谷は自分の目を疑った。そこには職員、利用者達が横一列に並び、入り口を塞いでいた。皆は隣に立っている者と手を繋いでいる。加賀谷の驚きは次第に消えていき、何度も小さくうなずいた。「これも自分の意志か」

「おい」正面入口へ突入の合図を待っている警官が横にいる警官に言った。「目の前の人の壁を突破するのか」

「合図がでたらやるしかないだろ」

「力づくで？　だって見ろよ、あの中には高齢者もいるぞ。俺は嫌だな」

「大泉！」加賀谷が怒鳴った「他の入り口の状況を確認しろ」

大泉が無線で確認を始めた。「第二班、状況を報告」

「こちら第二班、職員と利用者と思われる者が入り口を固めている」刑事が一番近くにいる男性利用者の加藤を見た。加藤は両手でシルバーカーを握り、鋭い眼光で刑事を睨みつけている。

第三班からの返事も同様に職員、利用者が入り口を塞ぐように立ちはだかっていた。

大泉は各班からの無線を聞いていた加賀谷に目を向けた。「意外な展開ですね」

「彼等にとっちゃ、必然かもな」加賀谷は投光器に照らされている正面入り口の職員、利用者の姿を見続けながら思った。あんな人の壁、すぐに崩れる。

「どうします、説得して退去してもらいますか」

「時間の無駄だ」

石崎は正面入り口を背にして、カメラの前に立っていた。「皆さん見えますでしょうか。正面入り口では、職員、利用者と思われる人達が互いに手を握り合って並んでいるのが分ります。まるでバリケードのように塞いでいます。彼等はたてこもり犯ではありません。しかし、まるで犯人達を守るかのように壁を作っています。これは事実です。繰り返します。今、警官隊の前に立ち塞がっているのは、職員、利用者です」

「ねえ、介護長」古賀が言った。「私達を照らしているこの明かり、まるでスポットライトみたいですね」

「ああ、世間が興味を引くようにしっかり俺達を照らしてくれ」

その時、山口の背後から佐藤の声が聞こえた。

「遅くなりました」

山口は振り返り、佐藤を見た。

「他の出入り口もオーケーです」佐藤が言った。

山口はうなずいた後に言った。「そうか、皆に無理強いはしていないよな」

「当然です。逆に皆はすすんで参加してくれました」

「巻き込んでしまってすまない」

「何を言っているんですか。私達はチームです。そしてあなたは頼りになる上司です。その上司が困っているなら動くのは当然です」そう言うと、佐藤は鈴木の際に入ると鈴木に向かって笑みを浮かべた。「鈴木君、こんな経験他の施設じゃ絶対できなかったわよ」

「大泉」加賀谷は正面玄関に並んでいる職員、利用者から目を離さずに言った。「各班に連絡。突入、そして入り口を塞いでいる職員、利用者に対して手荒なことはするな、丁重に扱うこと。これは厳守」

大泉はうなずき、無線で指示を伝えた。

突入の合図を受けた警官達が進み始めた。

第二班の刑事が加藤のそばに近づいた。「そこを通してもらえるかな」刑事が穏やかに言った。

加藤はシルバーカーを離し、両腕を組んだ。「通りたければわしを踏み越えて行け」

刑事はゆっくりと手を伸ばしシルバーカーを掴んだ。「この押し車を脇に寄せますよ」
「勝手にわしのベントに触るな！」

刑事は反射的に手を離れた。

「こうみえても俺は文化功労者を受賞したんだぞ！」

「えっ？」

「文化功労者だ！ 知らんのか。それでも貴様は日本国国民か！」

「まいったな」

第三班の刑事も困惑していた。

「こうちゃん、帰りましょ」女性利用者が近づいてきた刑事に向かって言った。「もうお夕飯の時間よ」

「私はこうちゃんじゃありません。私は埼玉県警の――」

「さっ、早く帰りましょ」女性利用者は刑事の手を掴もうと、腕を伸ばした。

「だからあ」刑事は女性利用者に言った。

女性利用者は刑事の手を掴んだ。「さっ、いらっしやい」

女性利用者が刑事の手を引っ張ると、刑事は反射的に女性利用者の手を勢いよく振りほどいた。彼女がバランスを崩し、よろめいた。

そばにいた日野が利用者の体を支えると刑事に厳しい視線を送った。

「私達の大切な利用者になんて事をするの！」

正面入り口の警官達も進みだし、入り口に近づき始めていた。

鈴木は近づいてくる警官達を見ながら不安そうに言った。「これって犯罪になるのかなあ」

「いいじゃない」古賀が言った。「取調室でかつ井を^{ただ}無料で食べれるわよ」冗談で返したが、古賀の目は硬い眼差しで近づいてくる警官に向けられていた。

「警棒で叩かれたら、やっぱり痛いんだろうなあ」鈴木が言った。

「大丈夫」鈴木の隣に立っていた長谷川が言った。「武器を持たない私達を叩くはずがないと思う、多分……」

「みんな」山口が半ば怒鳴るように言った。「何があっても手を離すな。絶対に中に入れるなよ」

小早川の手に力が入った。「あなた、お父様、私達を守ってね」

小早川の手を握っていた古賀と鈴木は彼女が手に力を入れたことを感じ取り、二人も手に力が入った。それが他の者にも伝わり、全員の手に入れた。

加賀谷は警官達が人間バリケードに近づいて行くのを見続けていた。「大泉」加賀谷が言った。「各班に繰り返し伝えろ。決して乱暴な真似はするな」

大泉はうなずき、伝え始めた。「繰り返す、乱暴な真似は厳禁。丁重に対応すること、これは厳守。繰り返す、えっ、何」大泉の言葉が止まった。大泉が正面入り口で動きが見られたのに気がついた。

「警部！」

「ああ、見えている」加賀谷は急いでは大泉から無線を取った。「各班、待機！　いいか、その場を動くな」

正面玄関に近づいていた警官達の動きが止った。同様に第二・三班の警官達もわずかに後ずさりして目の前にいる職員、利用者から距離を取った。

「あれ、止まった」鈴木が言った。

何を考えているんだ。山口には警官達が足を止めたことが理解できなかった。

「山口君」

山口の背後から自分を呼ぶ声が聞こえた。その声に山口は驚いた。なぜ小久保さんの声

が聞こえる。山口は手を離し、後ろを振り返った。そこには小久保と佐々木が山口を見ていた。

「どうして、何で出てきたんですか」

「もう充分やったよ。道を空けてくれ」

「行くんですか」

「俺達の役目は終わった」

「それに」佐々木が言った。「あいつらに確保され、両脇を抱えられ引きずられる姿でカメラの前に出るのは格好悪いだろ」そう言うと笑みを浮かべたが、すぐに佐々木の顔から笑顔が消えた。「俺達は堂々と施設から自分の意思で出て行く。さあ君達、人生の先輩達の行進だ。道を空けろ」

山口達は二人が通れるように脇に移動した。二人を見送れるよう、入り口から縦一列に並んだ。

小久保はいちばんそばに並んでいる山口を見た。「全国の利用者はお前達に期待しているぞ、介護のプロ集団。利用者達に未来を感じさせろ」

「おい若造」佐々木が山口に言った。「今日は楽しかったぜ。今度助けが必要になったら遠慮なく連絡しな。刑務所を抜け出して駆けつけてやるよ」

山口は涙をこらえるのに必死で言葉が出せなかった。

佐々木が山口の腰を叩いた。「じゃあな、頑張れよ」

二人は皆が並んでいる前を進み出した。

小久保と小早川の目が合った。

小早川は深く一礼した。

小久保も一礼を返した。

二人はゆっくり進み警官達の前に着いた。警官達は二人を検挙するため二人の体に触れることはしなかった。その代わりに、警官達は腕を横に伸ばした。それはまるで、どうぞあちらへと言っているかのようだった。

山口は施設内 P H S を手に取り、電話をかけ始めた。「山口だ」電話の相手は、他の入り口で立っていた日野だった。

「介護長、警官達は入ってきません。そちらで何が起きているんですか」

「小久保さんと佐々木さんは警察に投降した。もうフロアに戻って大丈夫だ。日野さん、ありがとう」

しばらく日野は黙っていた。「逮捕されたんですね」その声は涙声に変わっていた。

「立派な二人だよ。もう一つの出入り口で頑張っている皆に内線をかけて戻るように伝えてくれないか。それに、ありがたい言葉も付け加えてくれ」山口は電話を切ると皆に言った。「中に戻ろう」

全員が事務所に帰り、それぞれが椅子に座り休んでいた。

事務所の中に加賀谷が入って来た。加賀谷は山口を見つけると、真っ直ぐ山口の元に近づいた。「君は介護の責任者だったのか」

山口はうなずいた。「介護長の山口です」

「今回は派手にやってくれたな」加賀谷は山口の近くにある椅子に座り込んだ。加賀谷は椅子に浅く座り、上半身は背もたれにあずけ、両足を伸ばし楽な姿勢をとった。「今回は小久保やお前達にしてやられたって感じだ。まるで俺達警察はピエロだ。疲れさせやがって」

「私もこんな展開になるとは考えてもみませんでした。まさか事務所を占拠するなんて」「他に方法はなかったのか。小久保やお前たちの主張をするために、ここまで大きくしないとできなかったのか」

「他にも方法はあったでしょう。しかし、今回のやり方で世間は関心を向けてくれたはずです。インパクトは十分あったと思います」

「言えてるな。マスコミが派手に動くだろう」そう言うと加賀谷は眉間にしわを寄せながら考え込んだ。やがてわずかに笑みを浮かべて言った。「そうか、マスコミか。上手くやりやがったな」

「あの、刑事さん」古賀が小早川を連れてそばに来ていた。「こちらの小早川さんをお部屋に連れて行きたいのですが、よろしいでしょうか」

「ええ、どうぞ」加賀谷は立ち上がりながら言った。

「刑事さん」山口が言った。

「なんだ」

「事情聴取みたいなものは？」

「ああ、君達には聞きたいことが山ほどある。だがその前に利用者さんの介護をしろ。他の職員にも伝えてくれ」

「いいんですか」

「さてはお前、逃亡でもするのか。それとも証拠隠滅か」

「まさか」

「ひと段落したら戻って来い。俺はここにいる」

「すみません」山口は歩き出した。

「おい山口君」

山口は足を止めて振り返った。

「次やるときは、警察はなしだぞ。それと……頑張れよ」

山口は加賀谷の言葉を聞くと、表情を硬くさせ大きく一礼した。

澤田と上井は警察署に向かうため、澤田の車に向かって歩いていた。

「いたいた」石崎が澤田と上井を見つけた。

石崎とカメラマンが二人に近づき始めた。それに気づいた他の報道関係者も後に続いて走り出した。

「澤田さん」石崎が澤田を呼び止めた。

澤田は足を止め、石崎の方に振り向いた。

「関東放送の石崎といいます。ちょっとお話しがあるのですが、よろしいでしょうか」

「何？」

「この施設では自殺した利用者がいたとの話を聞いたのですが、本当ですか？」

澤田は質問に答える代わりに石崎をにらみつけた。

「また、情報によればその自殺者は利用料を滞納していたとのことですが、それも事実ですか」

「これは放送されているのか」

「この自殺は料金滞納と何か関係があるのでしょうか。そんな噂も聞こえているのですが」

「ノーコメント！」

「自殺には、あなたが間接的に関与していたとの噂も出ているようですが、そこはどうお考えですか」

「だからノーコメントだ！」

「それから過去にも無理矢理退所させられた利用者もいたという情報もあるんです。それも利用料滞納が原因ですか」

澤田は運転席に乗り込んだ。

助手席に乗った上井に、他の報道関係者が質問を始めた。「上井さん、犯人、いや利用者さんからの謝罪の要求を拒否されましたよね。拒否した理由は利用者さんの不満は受け入れられないということでしょうか。そこ、お聞かせください」

助手席にいる上井は視線を下に向けたままだった。

「上井さん。あなたはどのように考えているのですか。利用者の自殺、そして施設に不満があって起こしたたてこもり事件。施設責任者としてどのように考えて――」

車は集まった報道関係者の目の前から勢いよく走り出した。

カメラマンはカメラのスイッチを切った。「あいつら、うさん臭いな」

「ああ、こりゃ叩けば埃が出そうだ」石崎は施設を見上げた。「この事件、どでかい波紋を呼んだかもしれないな」

加賀谷は事務所を見渡すと、ホワイトボードに何か書かれているのに気がついた。加賀谷はホワイトボードに近づき、その言葉を読み始めた。

一九六九年 東大安田講堂

『連帯を求めて孤立を恐れず、力及ばずして倒れることを辞さないが、力尽くさずして挫けることを拒否する』

二〇二五年 特別養護老人ホーム やすらぎの里すずらん

『栄光に向かって走るあの列車に乗っていこう』

「ブルー・ハーツか」加賀谷は呟いた。

「ねえ、あなた」

加賀谷が声の方に振り向くと、小早川がホワイトボードを見つめていた。

「あれ、まだいたのですか」

「ええ、忘れ物に気がつきましてね。大事な夫の形見を忘れるところでしたわ」

「思い出して良かった」

「ねえ、この列車に乗ったらどこに行くと思います」小早川は加賀谷の顔を見た。

「行先、そうですね」加賀谷の表情に笑みが浮かんだ。「きっとあなた達が行きたい場所でしょう」加賀谷はホワイトボードに視線を戻した。「彼ならやりそうだ」

その時、大泉が加賀谷に声をかけた。「ここの職員からあの事務長に関する話を聞かされ

まして。過去にもここの利用者が自殺したそうです。どうやらその自殺にも関わっているかもです」

加賀谷は眉間にしわを寄せた。「関わっているってどういうことだ」

「自殺教唆です」

「ほう」そう言うと大泉をしばらく見つめたあと言葉を続けた。「障害を持った高齢者を自殺に追い込ませた……とんでもねえ野郎だ。おい奴はまだここにいるのか」

「いえ、すでに署に向かってます」

「そうか。大泉、現場職員の聞き取りや現場処理はお前が指揮を取れ」そう言うと、出口に向かって歩き出した。

「警部、どこに行くのですか」大泉は加賀谷の背中に向かって言った。

「署に戻って奴から全てを吐き出させてやる！」加賀谷は足早に歩きながら大泉を見ることもなく大声で言った。

他の刑事が加賀谷の声を聞き、大泉近づいた。「警部はどうしたの」

「どうしたのかって、鬼になったのさ」

山口が廊下を歩いている時に背後から自分を呼ぶ声が聞こえた。山口が振り向くと、そこには佐藤が立っていた。「お疲れ様、そして……ありがとう」

「介護長こそ。お疲れ様でした」

「皆は大丈夫かな」

「ええ、あの、これ」佐藤が手に持っていた箱を差し出した。佐藤は箱のふたを開けると、中にネズミがいた。

「藤田さんのネズミです。処分できませんでした」

山口は涙が出そうになるのを何とか抑えた。

「これ、フロアで飼おうかと思います。介護長、いいですね」

「もちろん、当然だよ。許可します」

「はいっ。それと……介護長、これからもよろしくお願いします」そう言うと、佐藤は階段に向かい始めた。途中、立ち止まり山口に振り返った。「介護長、両輪の轍。その言葉好きです」そして満面の笑みを浮かべると、小走りで階段を上っていった。

山口が佐藤の姿を見ている時、秋野が隣に来た。

「大きな風を吹かせたわね。お陰で皆の風向きも変わったみたい」

「台風なみだろ。でも俺がここまで吹かせたわけじゃない」

「やがて台風が去り、強い風がすがすがしいそよ風になることを願うわ」そう言うと満面の笑みを浮かべた。「私も頑張らなくっちゃ」

「ねえ、お兄さん」

誰かが山口の背後から彼の右腕を掴みながら言った。山口が振り向くと、そこには二階利用者の竹内が山口を見つめていた。竹内の隣に塚本が立っていた。

山口は塚本に言った。「なぜ竹内さんがここに」

「どうしても一階に行きたいって」塚本が笑みを浮かべながら言った。「竹内さんは今回のことをお祭りと思っているようです」

「お祭りだって」山口は驚きの表情で言った。

「ええ、たぶん二階の食堂のテレビでこの様子を皆で見ていた時に、職員の話聞いて一階でお祭りをしていると思ったんでしょう」

山口は苦笑した。「お祭りね……まあ、一階で起きたことで不安になるよりましか」

「ねえ」竹内が言った。「お祭りは終わったのかい。この次はもうないのかい」竹内の表情はこのお祭りが終わってしまうことが残念そうな暗い表情をしていた。

山口はしばらく竹内を見つめた後に笑顔でゆっくりと答えた。

「はい。でもね竹内さん、次のお祭りがすぐに始まりますよ」

「本当？」

「ええもちろん」

「よかったわ」竹内の顔に笑顔が浮かんだが、すぐに真顔になると周りを見渡し始めた。

「トイレはどこかしら」

山口は笑みを浮かべながら言った。「竹内さん、私がトイレまでご案内しましょう」そう言うと竹内に向かって右手を伸ばした。

「ありがとう」竹内の顔にも笑みが浮かんだ。そして右手を伸ばすと山口の右手を握った。

塚本は二人が手をつなぎながら歩いていく後ろ姿を見つめた。彼にはそれがまるで介護職と利用者が手を取り合って未来に向けて進んでいくような姿に写った。彼は眼鏡を外し、流れ始めた涙を手で拭った。

塚本に山口の声が聞こえてきた。

「そうだ竹内さん、明日は何をしたいですか」